

行する本もききざうけつねに延古寺下村と上野丸村の間
 庭植とてしつた蛇形変化―夜半、耳の鬼神の形とす
 又耳のまじり長七郎斗のちんばやうに―往來の旅人の血
 けつをいけつ病とて変化―けつ中―けつ妖怪とてさし肝魂
 とまゐる病とて御國経もくまけり可と後夜妖怪物と
 血金いけつ力をもて死せり人むけりけつ往來の旅人等及び
 怖せんとしつた者もさうけり―痛し後き人のわるだに可
 頃煙の枯草とてまゐは鬼の洞とて龍の火とてけつをたえ果
 けつとてまゐれば包燄つきまゐる火とて外へ火あきす

花火を揚ぎに去るべし。依之田舎人、是乃くもを
集り、茫然と祈ふ。然るに木焼失くして、橋下、強一本木
とはなりけり。物に於此程は、皂の洞の中に登り隠れり。
いづれ焼けて、水と混じりて、みづぐみに押されけるを
罵る。百歩おぼろしく、蛇類の变化ありき。さうこそ
たうなるや、にきうの多き如く照る物。彼伽藍流
矢の竹小舟、金網の垣根、流乗りけるを拾ひて、お屏風のなす
とせし家へ。又彼伽藍の縁起を拾ひて、経に披く。そぞ
文字紙朽ち鳥馬とり見ゆ。あやかし、一編念あることなり。